

いつ動くの? 「今」でしょ

Chim↑Pom [Sukurappu ando Birudo
プロジェクト道が拓ける]展

蔵屋美香 評

Chim↑Pomは一般に「今」に関わるアーティストと理解されている。書籍『SUPER RAT』の冒頭にも、「時代のリアルに反射神経で反応し、現代社会に全力で介入」する、とつたわれしいる。《Level 7 feat. 『明日の神話』(2011)は典型例だ。東日本大震災直後、事態の重大さに誰もが身動きできずにいた2011年4月末、Chim↑Pomはいたずらをするような身軽さで、渋谷駅の岡本太郎の壁画『明日の神話』(1969)に原発事故を描いたパネルを取り付けた。まさに「今」

員らしく、私はChim↑Pomの作品に見え隠れする歴史の問題に興味がある。例えば昨年、新宿歌舞伎町で開催された「また明日も観てくれるかな?」だ。この展覧会では、前回の東京オリンピックが開催された1964年が展示を貫くテーマとなっていた。会場の歌舞伎町商店街振興組合ビルも64年竣工であり、参照された作品のひとつ、ハイレッド・センターの『首都圏清掃整理促進運動』(1964)も、オリンピックのため慌てて東京を「清掃整理」(つまりスクラップ&ビルド)する当時の風潮を踏まえて行われたハプニングである。2020年の東京オリンピックを控え、私たちのまわりでも同じように「清掃整理」が進んでいる。そんな「今」

への素早い反応を入口として、Chim↑Pomは、「今」の中に回帰する過去、つまり1964年の姿を探り当てたのだ。今回彼らのホームグラウンドである高円寺のキタコレビルで開催された「道が拓ける」は、「また明日も」展自体を素材にスクラップ&ビルドを行った展覧会だ。振興組合ビルの解体時に破壊されたジオラマを再利用して『SUPER RAT-SCRAP & BUILD-』がつけられた。風俗店で働く「みらい」という名の女性の画像は、敷地内の地面に埋められ、新たに「みらいの埋立地」という作品になった。

もつとも話題となったのは、建築家、周防貴之との協働によりつくられた敷地内を貫く道、『Chim↑Pom通り』だろう。この道は埋め立てられた「みらい」を含むアスファルトの積層でつくられているのだが、加えて道の下にある地下空間には、振興組合ビルやキタコレビル、旧国立競技場などから出た廃材を地

層のように積み上げた作品『The Road Show』がある。地層とは言うまでもなく多くの過去が累積して示す断面だから、ここにもやはりいちばん上に2017年の「今」を載せた歴史が姿を現している。

思えばかつて『ヒロシマの空をピカッとさせる』(2009)のときにも、「ピカッとさせる」行為をスタート地点として被爆者との対話が始まった。つまり、「今」動いてみることで過去との出会いが果たされたのだ。また、福島原発事故という「今」に素早く反応しなければ、『明日の神話』が扱う第五福竜丸の被爆というテーマを可視化することはできなかった。彼らの嗅覚がとらえる「今」は、多くの場合こんな風に、「今」から働きかけることでしか捕まえられない歴史を舞台に引き出す。だから彼らの歴史は活きがよくて、辛くさくない。

PROFILE
くらや・みか 東京国立近代美術館企画課長



上—キタコレビル内に竣工した『Chim↑Pom通り』
下右—The Road Show 2017
下左—SUPER RAT-SCRAP & BUILD- 2017

Sukurappu ando Birudo
プロジェクト 道が拓ける

キタコレビル

7月29日~9月5日

本展は2016年10月に解体が決まっていた東京・新宿の歌舞伎町商店街振興組合ビルを舞台に「全壊する展覧会」として開催された「また明日も観てくれるかな?」展の続編。同ビルとともに破壊された作品群を新たに再構成するとともに、建築家の周防貴之と協働して高円寺のキタコレビル敷地内に『Chim↑Pom通り』と名付けられた道を竣工した。



会場となったキタコレビル外観